

# 接触場面における台湾人上級日本語学習者と 日本語母語話者による意見表明

呉 映 璇\*

## An analysis of express opinions in Taiwanese-Japanese contact situations

WU Ying-hsuan

### Abstract

This study investigated discourse structure of discussion between advanced Taiwanese Learners of Japanese and Native Speakers. This survey was carried out using a role-play of a discussion scene. The data was collected in Taiwan.

The result shows that the advanced Taiwanese Learners of Japanese attached importance to their own experience, held the initiative of the conversation, gained empathy from the person whom they were speaking to, and dealt with the situation when different opinions occurred. It is found that the advanced Taiwanese Learners of Japanese were discussing in a positive attitude. On the other hand, Native Speakers attached importance to objective information, coordinated with others, and regarded others' opinion as high priority. The evidence indicates that the Native Speakers have cooperative conversation-style.

Keyword: contact situations, express opinions, discussion

### 1. はじめに

日本の在代表機関である交流協会台北事務所は2012年にニールセン社に委託し、台湾における台湾人の対日世論調査を行った。その結果、台湾人は非常に高い割合（75%）で日本に親近感を持っていることが分かった。特に「最も好きな国」において、日本は1位であった。台湾人にとって日本は最も信頼でき、最も旅行したく、最も好きな国なのである。また、台湾外交部(外部省)はアメリカの世論調査会社ギャラップ社に委託し、一連の調査を日本で行った(2009)。その結果、76%の日本人が台日関係は良好であると認識し、65%が台湾を信頼できる国だと考えていることが明らかになった。以上の調査から見ると、台日双方は互いに好感を持ち、両国の関係は親密であることが考えられる。このように台湾と日本は深い関係を持ち、様々な交流活動が行われており、台日接触コミュニケーション場面も重要視されるべきであると考えられる。

また近年、学校同士の姉妹校締結や交換留学生制度など民間の交流が盛んに進行している。こうした交流の場が増えるにつれ、授業でのグループワークを始め、生活面の相談など合意形成の談話や意見交換の場面も増えている。文化背景の異なる両国はお互いの合意形成に対する着目点が異なることにより、誤解が生じることも考えられる。ホスト側の立場にいながら非母語話者であるJFL環境の台湾人日本語学習者（Taiwaneses Learner: TL）は、ゲスト側の日本語母語話者（Native Speaker: NS）と合意形成のような高レベルの言語能力と言語運

---

キーワード：接触場面、意見表明、合意形成

\*平成25年度生 比較社会文化学専攻

用能力が必要なコミュニケーションを順調に遂行することができるのだろうか。本研究は、まず台日接触場面における合意形成場面の談話の第一ステップと見られる意見表明の実態を明らかにしようとするものである。その解明を試みることによって、より素早くかつ摩擦なく合意が行われることにも繋がると思われる。

## 2. 先行研究

### 2.1 意見表明

国立国語研究所（1994）では意見表明を「行為を行う意志及び行わせる希望の表明」と定義している。一方、寅丸（2006）は「大学の授業や企業の会議等の公的な討論の場面で、あるテーマについて意見を求められた際に、評価や主張等を述べる行為を意味するものである」と意見表明を定義した。しかし、意見表明のような行為は学校の授業や企業の会議などのような公的な場面だけに限らず、友人同士の雑談や日常生活で何かを決める際にもよく行われている。そのため、本研究における意見表明の定義は、国立国語研究所（1994）の定義にしたがって、「行為を行う意志及び行わせる希望の表明」とする。また、国立国語研究所（1994）によると、意見表明には最初の提案と見られる意向・意志表明と最後の結論と見られる意見への同意/不同意が含むとし、本研究もこれに従い、合意形成談話の最初に表れた意向・意志表明と最後に表れた意見への同意/不同意を分析の対象とする。

### 2.2 母語場面の意見表明に関する先行研究

郭（2006）は、日本語母語話者と台湾人中国語母語話者それぞれ母語場面のグループ討論を通し、台湾人と日本人の会話スタイルを比較した。その結果、まず、台湾人は相手の意見の欠点を述べてから自分の意見を表明するという直接的に反対する意見表明をする傾向があるのに対し、日本人は相手の意見に一回賛同してから、自分の意見を表明するという間接的に自己主張をする傾向があることが明らかになった。また、台湾人は会話参加者が同じ立場に立って討論するのではなく、各自の立場を確かめながら、反論し合っていくプロセスを取っている。それに対し、日本人は会話参加者が基本的に同じ立場に立って、相手の意見を取り入れながら、自分の意見を加えていくというプロセスを用いて、結論へ至るとい傾向があると述べている。上田（2008）は、日本人はどのように意見を述べるのかを明らかにするため、日本語母語場面のディスカッションの調査を行い、その対照として米語（アメリカ英語）母語場面のディスカッションを取り上げた。日米のそれぞれのグループ討論の中での意見を述べる談話を分析した結果、日本語母語話者のディスカッションは、あるときは反対の立場に賛同するといった、首尾一貫しない述べ方をする傾向が見られた。また、日本語母語場面では、それぞれの参加者は賛成または反対をするための分析的意見を持たないが、話し合っているうちに結論が絞られて来る傾向があることも指摘している。大和（2009）は日本語教材を作成するために集めた5名の日本語教師が行ったグループ討論会話をデータとした。意見交渉の過程で会話参加者が意見の一致を得るまでにどのように議論を展開していくのかについて研究した結果、結論に至るまでの議論の過程では、①意見の不一致が表面化するシーケンス、②自分の意見の主張と説得のシーケンス、③意見調整を試みるシーケンスの三段階が見られた。また、一人一人の会話参加者のシーケンスごとに比較しても、それぞれ自分の意見の正当性を主張し、他の話者を説得しつつ、相手の意見に理解を示したり、自分の意見を弱めたりして、合意のために妥協する発話も見られたと指摘している。李（2001）では、議論の場における言語行動について、日本語母語場面と韓国語母語場面の類似点と相違点をディベート形式のロールプレイを用いて研究を行った。その結果、相手と異なる意見を述べる時、日本人同士の日本語母語場面では、相手配慮型を多用する傾向が見られ、自己主張優先型より2倍以上も使用しており、相手配慮型の方を好む傾向があることが窺えた。寅丸（2006）は日本語の討論の談話における意見表明の構造分析を行った結果、まず、意見表明の構成要素は、必須要素の「意見」と、証拠付ける要素の「事実」と「根拠」の三要素があると指摘している。また、日本語母語話場面の意見表明では、「事実→根拠→意見」という順序で提示すると、話題が展開しやすいと述べている。そしてこの研究においても「意見」は「事実」や「根拠」による証拠付けが行われると、述べられやすいという特徴があることを指摘している。つまり、「事実→根拠→意見」のような順序は日本語の討論談話における意見表明の一つの方略であることが分かる。

### 2.3 接触場面の意見表明に関する先行研究

野原ら(2005)は、面識のない日本語母語話者と日本語非母語話者の課題解決を目指す会話をデータに、提案から同意に至るまでの手順に何らかの関係があるか、話の流れと用いられる言語形式に関連があるかについて分析した。その結果、会話の流れには、提案の発話から始まるものと、意見要求など何らかの前置きをした後に提案を行うものの二つが見られたと述べている。また、提案の発話から始まる会話には直接的な表現が多用され、前置きをした後に提案する場合はより暗示的な表現を使用する傾向があることも見られたと指摘している。李・松崎(2009)は日本人と中国人の言語行動を母語場面と接触場面に分けて比較した。日本語母語話者には事実を言いながら自分の意見を表明する傾向と、自分の考えを話題にしても、一般的なイメージに基づいて語る傾向が見られたのに対し、中国人日本語学習者は相手の態度に応じて事実を確認しあうことにより、自分の主張のメリットを伝えることや、自分の主張を通すために、再提案する傾向があると述べられている。また、接触場面での意見の述べ方の相違について、日本人は母語場面で6割以上が「共感型」の会話スタイルを好む傾向があるのに対し、接触場面では「説得型」が「共感型」より1.5倍多く使用されることが見られ、接触場面での日本人は有利な意見を多く表明する傾向があることが分かった。つまり、日本人は常に共感を示す態度で相手と話し合うのではなく、接触場面の場合、相手の主張が強い時や相手に共感的な態度がない場合には、自分の意見を強く表明できるよう調整することが明らかになった。この結果は、李(2001)での日本語母語話者と韓国人日本語学習者で行われた接触場面の会話において、日本人は日本語母語場面と同じ傾向が見られ、自己主張優先型よりも相手配慮型を多用することが窺えたが、相手が韓国人であるときはさらに相手配慮型を好む傾向があるという結果と異なっていることが分かる。また、李・松崎(2009)は日本人も中国人も母語場面での会話スタイルをそのまま接触場面に使用するのではなく、両者とも接触場面ではよりお互いの会話スタイルに近づくような言語行動を調整していると指摘している。

以上のように、話者はもともとと同じような意図を持った言語行動であっても、接触場面では異文化の異なる方法や枠組みに基づき談話を行うため、同じ言語であっても母語場面と接触場面では違った表現が見られると示唆された。接触場面での日本語母語話者の言語行動についてさらに検証する必要があると考えられる。

寅丸(2006)、上田(2008)や野原ら(2001)では3人以上のグループ討論会話をデータとしたため、2者間会話と異なる発話や状況があると思われる。例えば、話題の豊富性やターン取りの順番などの特徴は、2者間会話とグループ討論は異なっている。あるいは大和(2009)で述べた、対立している意見が出た際に、第3者が合意へ向けたヒントを与えるという役割を担っていたという特徴は、グループ討論の場面ではしか見られない。よって2者間の合意形成談話の実態を明らかにする必要がある。

また、今までの意見表明に関する研究は、初対面場面を対照とした研究がほとんどであり、友人関係をデータにした研究はまだ多くなく、例えば木山(2001)が挙げられる。木山(2001)は接触場面での意見の述べ方から見るコミュニケーション原理の違いは何かについて研究を行った。研究方法としては、7カ国の学習者計28名(内台湾人日本語学習者5名を含む)と比較対象とする日本語母語話者10名を対象者にし、初対面の日本語母語話者とロールプレイを行った。そもそも初対面の人にどれくらい本音を言えるのかは疑わしく、また、自分の意見を保留せずに相手に伝えることは難しいと考えられる。

そこで本研究では友人関係である学習者と母語話者を対象にし、台湾人日本語学習者と日本語母語話者との台日接触場面における合意形成談話の意見表明の特徴を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究課題

以上の先行研究と研究目的を踏まえ、本研究では台日接触場面における合意形成談話による意見表明の特徴を検討するため、以下のような研究課題を設けた。

研究課題 台湾人上級日本語学習者と日本語母語話者の接触場面における合意形成談話に現れる意見表明の特徴は異なるか。

## 4. 研究方法

### 4.1 研究協力者

2012年3月に台湾でデータ収集を行った。友人関係のJFL環境のTLとNSを2名1組とし、計15組(30名)のロールプレイ会話データを収集した。研究協力者のNSは台湾の大学に在籍している日本人で、研究協力者のTLは、全員日本語能力試験一級に合格しており、日本語学科に在籍している台湾人である。また、性差による影響を排除するため、会話参加者のペアは同性同士に設定した。

### 4.2 調査資料

会話場面はTLにとってもNSにとっても身近なもので、日常生活に起こりうる場面を選んだ。学園祭の打ち上げ会の場所を決める場面である。一方はカラオケを主張し、一方は食べ放題のレストランを主張するよう設定した。以下ロールカードを示す。

表1 本研究で使用されたロールカード

- |   |
|---|
| <p>A 学園祭の打ち上げについて、日本人の友人と相談します。あなたはカラオケがいいと主張します。しかし、友人はあなたと違う意見を持っています。なぜカラオケにしたいかその理由を言い、よく話し合ってお互いの考えを理解してから結論を出しましょう。</p> <p>(中国語訳) 你將要和日本朋友討論關於校慶慶功宴的事宜，你覺得去KTV比較好，但日本友人卻和你有著不同的想法。請你把為什麼KTV比較好的原因告訴日本友人，並且兩個人互相討論後，決定出慶功宴的場所。</p> <p>B 学園祭の打ち上げについて、台湾人の友人と相談します。あなたは食べ放題のレストランがいいと主張します。しかし、友人はあなたと違う意見を持っています。なぜ食べ放題のレストランにしたいかその理由を言い、よく話し合ってお互いの考えを理解してから結論を出しましょう。</p> |
|---|

事前に用意したロールカードを協力者に渡し、ロールプレイの意味、ロールカードの内容を説明した。協力者の同意を得た後に、「なぜその場所にしたいかその理由を言い、相手とよく話し合ってお互いの考えを理解してから結論を出そう」と協力者に教示し、会話内容を録音した。収録時間は5分から10分と設定したが、厳しい制限はせずに、協力者に任せた。また、会話は日本語で行っているが、TLには日本語のロールカード以外に中国語訳のロールカードも与えた。

### 4.3 分析方法

分析対象とする発話の区切りについて、本研究は杉戸(1987)による発話文の定義を採用した。杉戸は、「一人の参加者の一まとまりの音声言語連続(笑い声や短いあいづちも含む)で、他の参加者の音声言語連続(笑い声や短いあいづちも含む)とかポーズ(空白時間)によって区切られる単位」と発話を定義している。

また、分析対象とする「意見表明」部の発話は、談話開始/途中の意志・意向表明と最後の意向への同意/不同意の発話である。さらに、意見表明には、「自分の意志・希望を表明する」に関するものと、「相手が表明する意志・希望」に関するものの二つに分けられる。本研究では二つを分けて分析する。なお、「意向への同意」は本研究では討論の結論と捉え、1組に一回の「意向への同意」が出現可能であるとする。すなわち、討論談話に話者Aが意向への同意を使用した場合、その討論の結論は話者Bの意見を採用されたと考える。

筆者は分析枠組みに沿って発話を分類し、分類したものを一名の日本語母語話者に確認してもらった。

#### 4.3.1 分析枠組み

吉岡(1993)は、話し合いには様々な目的遂行のためのコミュニケーション方略を見出すことができ、その目的を遂行するには、言語行動のどのような機能を優先させるかと関連付けている。談話参加者はそれぞれの目的に向かって、会話を展開し、相手の出方に対応しながら、目的の方向へコミュニケーションを進展させようとし

ているため、談話進展の方略（ストラテジー）が重要になると指摘している。そこで本研究は、方略の概念を用いて分析を行う。また、国立国語研究所（1994）の単位方略の枠組みは、合意形成場面での意見表明の特徴を分析することに有用であると考えられたため、分析の目的に照らして修正した単位方略の枠組みを用いた。

表2 本研究の分析枠組み

1. 自分の意志・希望を表明することに関するもの	
1.1	意志の表明：自分が実現しようとする決意や心づもりを述べる
1.2	意向の表明：他者に実現を求めようとする希望や選択内容、好みなどを述べる
*1.3	提案の提示：新提案や方針などの内容を提案し、相手の反応を待つ
*1.4	勧誘：自分とともに行為をするよう勧める
2. 相手が表明する意志・希望に関するもの	
2.1	意向表明への注目表示：相手が表明した意志・意向を受信したことを示す
2.2	意向への同意：相手が表明した意志・意向の内容への同意
2.3	意向への不同意：相手が表明した意志・意向の内容への不満の表明
2.4	意向表明の要求：相手の意志・意向を尋ねる
2.5	意向確認の要求：表明した意志・意向が間違いないことを認めるよう求める
2.6	意向の確認：意向確認の要求に対する肯定の答え
*2.7	意向への支持：相手の意見を直接賛成しなく、相手意見の良い点を表明。意向への同意や結論確認の前後に表れることが多い。

本研究の会話データでは、国立国語研究所（1994）の単位方略に当てはまらない発話もあるため、国立国語研究所にない新たな単位方略を分析枠組みに加えた。以下に加えたものと会話例を示す。録音された会話を音声に忠実に文字起こしをした<sup>1</sup>。

## \* 1.3 提案の提示【会話例1：データ④】

1 NS4 学園祭の打ち上げ：(.)ね どうしましょうか?

→ 2 TL4 あ：カラオケ：はどうでしょう

## \* 1.4 勧誘【会話例2：データ①】

→ 1 NS1 じゃ(2)じゃ打ち上げで(.)食べ放題行こうよ

## \* 2.7 意向への支持：【会話例3：データ①】

1 NS1 じゃ(2)じゃ打ち上げで(.)食べ放題行こうよ

2 TL1 hhh食べ放：え食べ放題↑そっか 俺カラオケの方がいいかなと思ってカラオケにしようか

(中略)

28 TL1 カラオケ：

→ 29 NS1 カラオケ(.)う：ん(.)そっか(2)カラオケの方が長い時間

30 TL1 (.)そうですね 安いし

## 5. 結果

課題：台湾人上級日本語学習者と日本語母語話者の接触場面における合意形成談話に現れる意見表明の特徴は異なるか。

本研究は、意見表明に「自分の意志・希望を表明する」に関するものと、「相手が表明する意志・希望」に関するものを分けて分析するため、まず図1にTLとNSの意見表明における「自分の意志・希望を表明する」に関する単位方略の使用回数を示す。

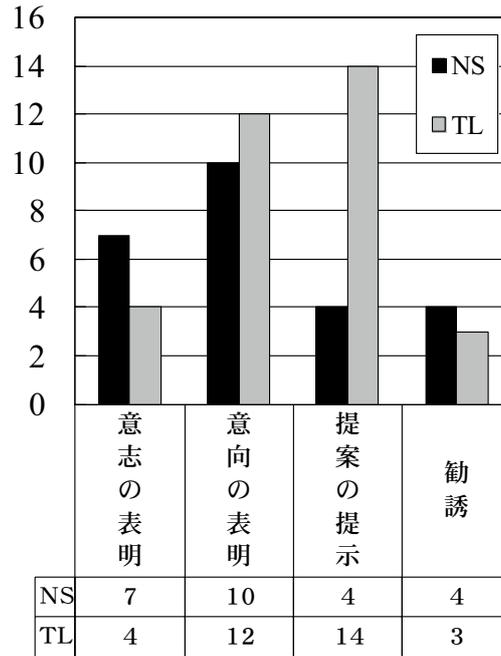


図1 意見表明による「自分の意志・希望を表明する」に関する単位方略の使用回数

図1で示したように、意見表明の「自分の意志・希望を表明するもの」の単位方略について、TLがNSより多用しているものは、「意向の表明」と「提案の提示」の二項目である。TLの「提案の提示」には二つのパターンが見られる。一つ目は、談話開始の意向表明に見られるものである。もう一つ目のパターンは、談話の途中で双方の意見が行き詰まった際に出現されたものである。TLは自分が考えている意見を提示する方法を多用しており、相手に共感や同意を求める特徴がある。一方、NSがTLより多用しているものは、「意志の表明」と「勧誘」の二項目である。

また、各単位方略の使用回数にTLとNSとの差が統計的に有意であるかどうかを見るために、それぞれ  $t$  検定を行った。その結果、「提案の提示」は、TLの方がNSよりも有意に高い使用回数を示した ( $t(28)=2.59, p<0.05$ )。なお、TLとNSの使用に有意差が見られないものは「意志の表明」( $t(28)=.98, p>0.1$ )、意向の表明 ( $t(28)=.61, p>0.1$ ) と勧誘 ( $t(28)=.41, p>0.1$ ) である。

次に、TLとNSの意見表明における「相手が表明する意志・希望に関するもの」の単位方略の使用回数を図2に示す。TLがNSより多用している項目は、「意向表明の要求」と「意向の確認」である。それとは反対に、NSがTLより多く使われているものは、「意向表明への注目表示」、「意向への同意」、「意向確認の要求」と「意向への支持」が挙げられる。また、意向への同意は本研究では合意の形成に捉えるため、1組に一回の「意向への同意」が出現可能である。すなわち討論談話に話者Aが意向への同意を使用した場合、その討論の結論が話者Bの意見を採用したと考えられる。なお、本研究においては、「意向への不同意」の発話を「行かない」、「行きたくない」、「だめ」、「嫌」など直接的な拒否の発話と想定したが、今回のデータではこのような発話が見られず、TLもNSも「意向への不同意」の使用は観察されなかった。

また、各項目に  $t$  検定を行った結果、「意向への同意」に関して、NSの方がTLよりも有意に高い使用回数を示した ( $t(28)=2.41, p<0.05$ )。さらには、「意向への支持」に有意傾向があることも示唆された ( $t(28)=1.88, p<0.1$ )。有意差が見られないものは、「意向表明への注目表示」( $t(28)=.71, p>0.1$ )、「意向への不同意」(0)、「意向表明の要求」( $t(28)=.31, p>0.1$ )、「意向確認の要求」( $t(28)=.47, p>0.1$ ) と「意向の確認」( $t(28)=.59, p>0.1$ ) であった。

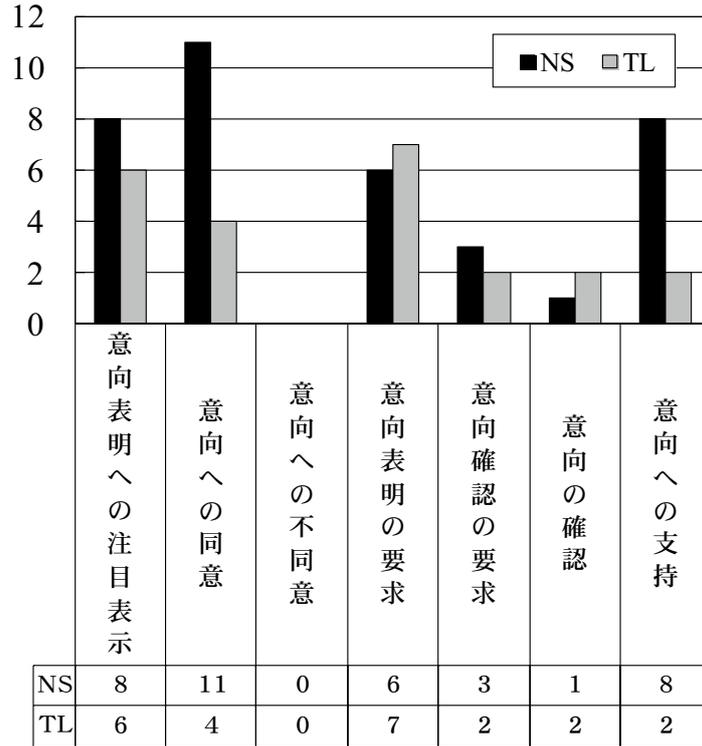


図2 意見表明による「相手が表明する意志・希望」に関する単位方略の使用回数

## 6. 考察

本研究では、提案から意見を求めたり、話し合ったり、最後の結論に至るまでの台日接触場面における合意形成談話の意見表明を単位方略に基づいて分析を行った。その結果、「提案の提示」と「意向への同意」に有意差、「意向への支持」に有意傾向があった。

まず、自分の意志・希望を表明する際に、TLは「提案の提示」を、NSは「意向の表明」を多く使っていることが観察された。TLが「提案の提示」を多用することは、意見表明をする際には、一方的に自分の意見を表明するのではなく、対話相手への配慮も考えているといえよう。このようなパターンとして見られた「提案の提示」は以下の会話例1に示している。例えば、TLは「カラオケに行きたい」や「カラオケがいい」という自分の意見を直接かつ強い表現で表明するのではなく、「カラオケはどうでしょう」という一つの提案を提示するような形で相手の共感を求めている。

### 【会話例1：提案の提示】(データ④)

1 NS4 学園祭の打ち上げ：(.)ね どうでしょうか？  
 → 2 TL4 あ：カラオケ：はどうでしょう

また、合意形成談話の途中で双方の意見が纏まらない場合、TLは相手にも納得できるような方針などの内容や、新しい提案を提示することによって、会話を進行させる傾向が見られる。このような傾向が見られることから、TLは積極的に会話に参加し、片方だけに有利な状況を避け、お互いにとって有利な方向へと会話を進めるような特徴もあると言えるだろう。以下会話例5に下線で示している部分は、意見が行き詰まった際に現れた「提案の提示」である。

### 【会話例5：提案の提示】(データ⑫)

26 NS12 だって最近ずっとカラオケ行ってないんだもん

- 27 TL12 でも最近食べ放題行ってないもん  
 28 NS12 hhh いやでも ご飯はほら毎日食べてるじゃん  
 29 TL12 でも食べ放題だったら もうあのお酒も飲み放題できるし：  
 30 NS12 あ でもやっぱほら 女の子だったらダイエットしてる子もいるじゃん  
 → 31 TL12 あ 違う だって もし今の時間帯によると 先に食べ放題に行つて：で それで：あの：： オールしない↑(.) カラオケで  
 32 NS12 あ そっか そうだよな だってカラオケだったら夜：夜の11時から5時だったら 学生：オール 何だろうフリータイムで：カラ館だったら 880円とかって安いもんね

会話例5では、NS12はカラオケがいいと主張し、一方のTL12は食べ放題派であることが分かった。双方はそれぞれの主張について、メリットや行きたい理由を述べ、相手を自分の意見に従えようとしている。しかし両方とも譲らず、自分の主張を強く守っている。そこでTL12が自分の意見を主張しつつ、相手にも受け入れやすくさせるために、発話番号31で、「先に食べ放題に行つてから、カラオケに行く」という提案を提示した。TL12の提案を聞いたNS12は、発話番号32で意見が変わったことが見られた。会話例5のような自分の意見を相手にも受け入れやすくするための「提案の提示」の発話はTLの会話でしばしば出現した。

一方、NSは「意向への同意」と「意向への支持」の使用が多く見られ、強く自分の主張を貫かない特徴がある。また、NSが「意向への同意」を多用する結果について、前節においても述べたように、1組に一回の「意向への同意」が出現可能であるため、NSの使用率がTLの使用率より上回ることから、NSは接触場面における討論談話において相手の意見に合わせる特徴があるといえよう。そして、本研究で見られたNSが「意向への同意」と「意向への支持」を多用することは、上田(2008)の母語場面での日本語母語話者のディスカッションは、あるときは反対の立場に賛同するといった、首尾一貫しない述べ方をする傾向があるという結果のように、接触場面での日本語母語話者においても同じ結果があるといえよう。それから、TLもNSも「意向への不同意」の使用が観察されなかったことについては、TLとNSともに、相手の意見に直接的な不同意を言わず、より円滑な討論場面を求めていると考えられる。また、相違点については、「意向への同意」に有意差が見られた。つまりNSはTLの意見に合わせる傾向があることが示唆された。

## 7. 今後の課題

本研究では合意形成談話の意見表明部に限って分析したが、今後は意見表明した後の同意表現や不同意表現など、分析単位をより細かく取り上げて研究する必要がある。また、合意形成のプロセス、いわゆる意見交換の仕方や流れの分析も必要であると考えられる。様々な角度からの研究を重ね、台湾人日本語学習者と日本語母語話者による合意形成談話の全貌を見ていきたい。

### 【注】

#### 1. 文字化に用いた記号

?	上昇イントネーションを伴う質問
↑	文中上昇イントネーション
:	音の引き伸ばし (：の数は長さを表す)
(.)(半角数字)	沈黙/沈黙の秒数 (例：(2)=沈黙2秒)
…	聞き取れなかった部分
h	笑い
[]	同時発話するときの重なり
,	言い淀み (例：よ、よかった)

## 参考文献

- 台北駐日経済文化代表処 <http://www.taiwanembassy.org/mp.asp?mp=202>
- 財団法人交流協会台北事務所 [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top)
- 上田安希子 (2008) 「日本人はどのように意見を述べるのか：日米の「グループの中で意見を述べる」談話の対照分析から」『日本女子大学英米文学研究』 43, 21-36.
- 郭碧蘭 (2006) 「日台の会話スタイルの比較研究—母語話者のグループ討論を通して」『明海日本語』 10・11, 37-49.
- 木山三佳 (2001) 「話し合い場面での日本語学習者と母語話者の談話の比較—意見の述べ方にみるコミュニケーション原理の違い」『山村女子短期大学紀要』 13, 63-77.
- 国立国語研究所 (1994) 『日本語教育映像教材中級編関連教材「伝え合うことば」 4』
- 杉戸清樹 (1987) 「談話行動の諸相—座談資料の分析」『国立国語研究所報告』, 92.
- 寅丸真澄 (2006) 「日本語の討論の談話における「意見表明」の構造分析」『早稲田大学日本語教育研究』 9, 23-35.
- 野原美和子・藤江希子・宮谷敦美 (2001) 「提案から同意に至る会話の分析—日本語母語話者と日本語非母語話者の課題解決を目指す会話データを基に」『岐阜大学留学生センター紀要』 21, 31-45.
- 大和祐子 (2009) 「意見の一致を目指す会話における意見交渉の過程—意見が異なる者同士の「歩み寄り」の始まりを中心に」『言葉と文化』 10, 59-75.
- 吉岡泰夫 (1993) 「言語行動としての話し合い—目的遂行のためのコミュニケーション方略」『日本語学』 12, 21-29.
- 李善雅 (2001) 「議論の場における言語行動—日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『日本語教育』 111, 36-45.
- 李霽芳・松崎寛 (2009) 「交渉場面における日本人と中国人の言語行動—母語場面と接触場面の量的分析を中心に」『広島大学日本語教育研究』 19, 55-62.